HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	連環画「太行山の松柏 九州の桜」 : 八路軍に救出された孤児・美穂子のものがたり
Author(s)	池田, 真衣
Citation	連環画研究, 4, 2-17
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98409
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98409
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_2-17.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第 4 号　2015 年 2 月

連環画「太行山の松柏 九州の桜」
——八路軍に救出された孤児・美穂子のものがたり

池田　真衣

■連環画「太行山の松柏 九州の桜」

連環画「太行山の松柏 九州の桜（原題：太行的松柏九州的桜）」は、中国共産党が「中日友好」を宣伝していた時代に創作され、『連環画報』1980 年第 10 期に掲載された作品で、表紙も飾っている。全 20 コマの短編で、物語は、実際の出来事をもとに、日中戦争のさなかに救出された日本人孤児・興子（シンズ）（美穂子）が八路軍のおじさんたちと一緒に過ごし、日本軍へと届けられるまでを描く。



▲『連環画報』1980 年第 10 期表紙

この作品が発表される数か月前の 1980 年 5 月 29 日、共産党の機関紙である『人民日報』に「日本の少女よ、今どこに」という記事が掲載された[1]。これは、もともと国際児童デー（6 月 1 日）に合わせて、『解放軍画報』1980 年第 6 期に掲載するために、解放軍報社の副社長である姚遠方がしたためた文章であった。しかし、国営通信社である新華社が、『解放軍画報』第 6 期刊行に先駆け、5 月 28 日に全文を国内外に流したのち、『人民日報』、『光明日報』、『解放軍報』、『文匯報』、その他いくつかの省や市の新聞に掲載されるはこびとなったのである[2]。日本も例外ではない。『読売新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』などが、40 年前に八路軍に救われた孤児・興子ちゃんを、救出当時、軍を率いていた聶栄臻（じょうえいしん）将軍が捜していると報道した[3]。そして数日後、その少女と思しき、栂（かこい）美穂子（旧姓、加藤）さんが宮崎県都城市で見つかったのである。果たして、美穂子さんは日中両国に一大ブームを巻き起こした（本稿では以下、これを「美穂子ブーム」と称する）。同年 7 月に美穂子さんが訪中した際には、熱烈な歓迎を受ける姿や、聶将軍と涙の再会を果たす姿が日中両国で報道された。

本稿は、この「美穂子ブーム」のなかで創作された連環画「太行山の松柏 九州の桜」に注目し、その特徴と「美穂子ブーム」について紹介しながら、その創作の目的

を、当時の状況や、創作経緯から読み解こうと試みるものである。

■作品の特徴

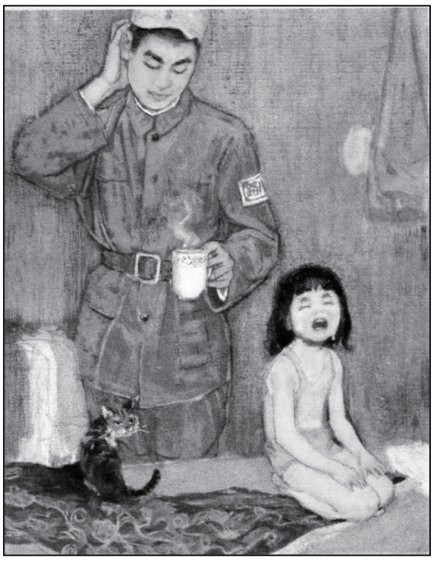
作品の特徴を述べる前に、まず連環画「太行山の松柏 九州の桜」のあらすじをもう少し詳しく紹介したい。

百団大戦のさなか、火の海と化した井陘（せいけい）の炭鉱から、母を亡くした日本人の姉妹が八路軍の兵士によって救出された（2 コマ目）。一歳に満たない妹は中国人の乳母が、四歳のお姉さん・興子は、八路軍の兵士・封奇書が面倒をみることになる。言葉は通じない、生活習慣もわからない。子どもが病気になってしまったらどうやって責任をとればよいのだろう。子守役を任された十七歳の封くんは、しりごみしていた。しかし、幹部からの説得と、少女の泣き声に心を打たれた封くんは、この任務に真摯に向き合う。

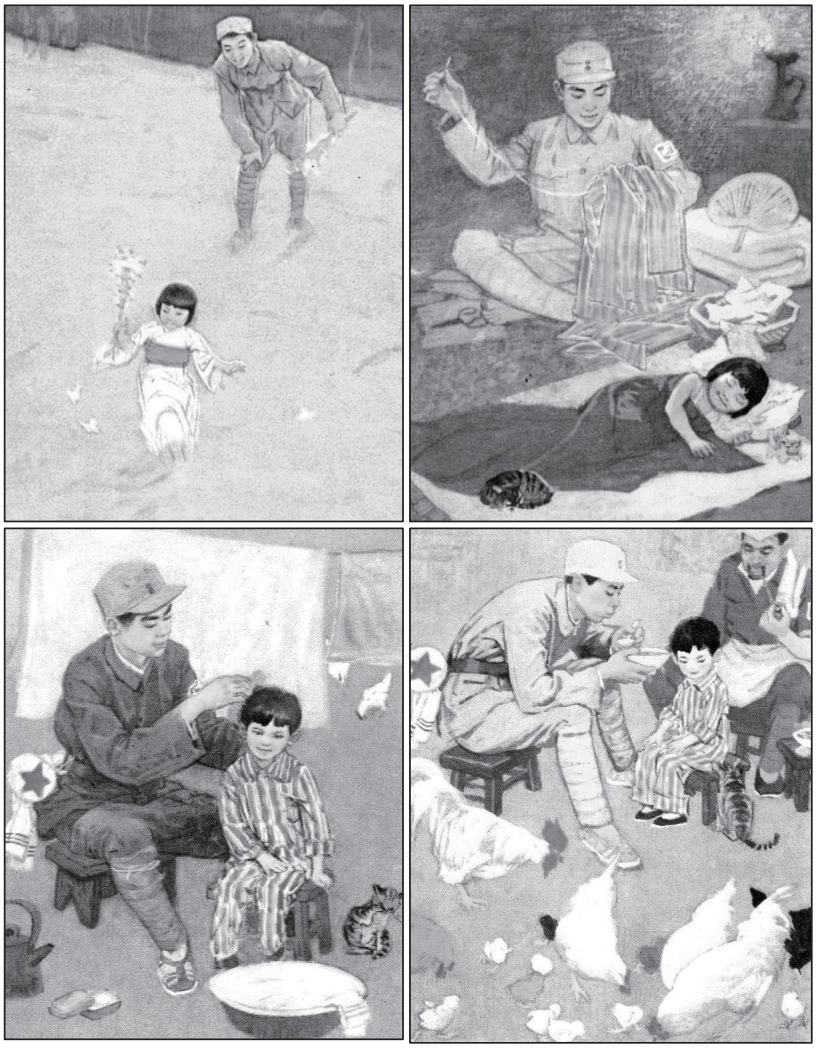
興子は、食事も喉を通らず、眠ることもできず、ひどくおびえて落ち着かない。封くんが粉ミルクを用意しても、泣いてばかりであった（6 コマ目）。しかし、八路軍のおじさんたちに見舞ってもらったり、封くんと川で魚を捕まえたり、野原で花を摘んだり、蝶を捕まえて遊ぶうちに、興子は笑顔を取り戻し（10 コマ目）、ぐっすりと眠れるようになる。封くんが、興子のために、新しい服を縫ったり（12 コマ目）、髪を梳かしてあげたり（13 コマ目）、ごはんを食べさせたり（14 コマ目）と一生懸命に世話を焼いていると、興子はみるみる健康を取り戻していった。



▲ 2 コマ目。八路軍兵士に抱かれた興子。着物姿から日本人であることが一目でわかる。



▶ 6 コマ目。封くんに背を向けて泣きじゃくる興子。封くんは、手で頭をかき、困り果てた様子。ふたりの間にはネコが座り、心配しているのか、興子の様子をジッと見つめている……。



◂左上：10 コマ目。花を摘み、蝶を追いかける興子。

◂右上：12 コマ目。幸せそうに眠る興子。足もとには丸くなって眠るネコ。封くんは興子のためにお裁縫。

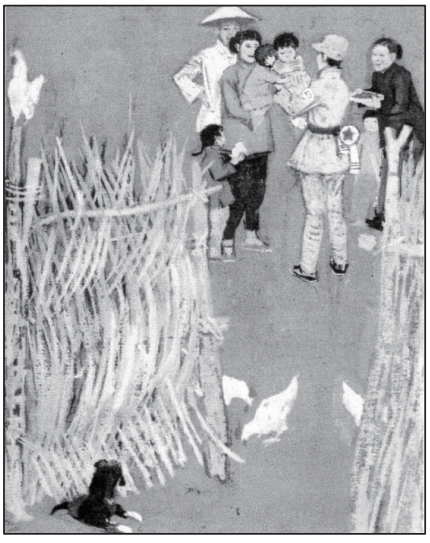
◂左下：13 コマ目。封くんお手製の服を着て嬉しそうな興子。髪を梳いてもらっている興子の足もとには、毛づくろいをするネコ。

◂右下：14 コマ目。ふうふうと興子のためにスープを冷ましてあげる封くん。

▾下：17 コマ目。妹を抱く乳母。手前にはみなの様子を見守るイヌ。

すっかり元気になった興子を見て、八路軍の同志たちが、封くんを褒め称えると、少女もみなの気持ちが分かっているかのように、「叔叔（シューシュ）！ 叔叔！」と中国語でしきりに封くんを呼ぶのであった。

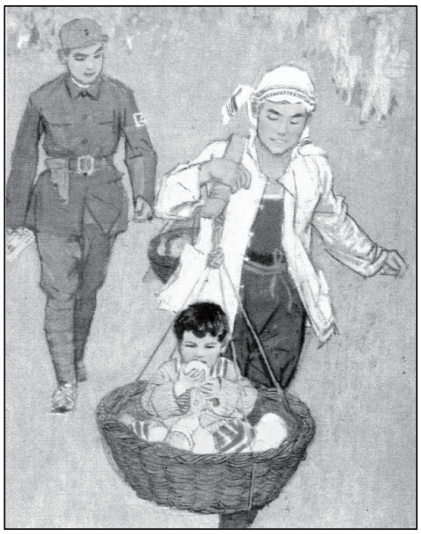
一方、中国人の乳母に預けられている興子の妹も、白くふっくらとして、元気な様子。姉の興子が封くんと手をつないで訪ねに行くと、ウーウーアーアーと声を出し、小さな手のひらを叩く。興子が一回もう一回と妹にキスをすると、乳母は思わず眼尻に涙を光らせた（17 コマ目）。



ある日のこと、聶司令員が凱旋して幼い姉妹を

見舞う。聶司令員に抱かれたふたりは、まるで両親のそばに帰り着いたかのようであった（18 コマ目）。その後、幼い姉妹は、司令員がしたためた（日本軍司令官宛ての）手紙とともに、農民の担いだかごに乗せられて（19 コマ目）太行の山を越え、日本軍へと運ばれてゆくのであった。



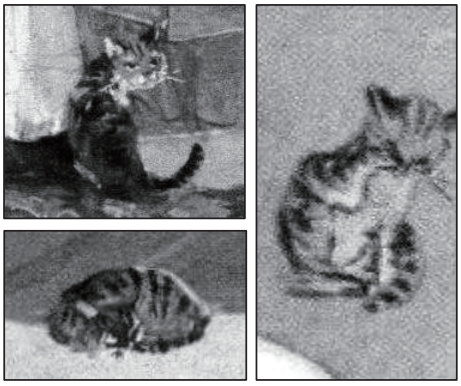


◂左：18 コマ目。梨を頬張る姉妹と聶将軍。

◂右：19 コマ目。姉妹をかごに乗せて日本軍のもとへ出発。封くんの手には手紙。背景には、姉妹を見送る村人や八路軍の同志たち。

以上が、あらすじである。20 コマ全てがカラーで掲載されたこの作品は、最初の 2 コマでは朱を用いて「戦火」を描き、3 から 7 コマ目では、やや暗い色合いを用いて、子守役の封くんや少女の不安な気持ちを描いている。ところが、少女と封くんがうちとけた 8 コマ目以降は、明るい色合いを用いて、農村のほのぼのとしたさまや、人々のやさしさを表現しているように感じられる。また、全編を通してやわらかなタッチで描かれた油絵からは、興子への愛情が伝わってくるようで、非常に心温まる。

よく見てみると、コマのあちらこちらにネコ（5、6、12、13 コマ目）、空を飛ぶ鳥（8、16、20 コマ目）、魚（9 コマ目）、蝶（10、11 コマ目）、ニワトリ（13、14、17 コマ目）、イヌ（17 コマ目）など、さまざまな愛らしい小さな生きものが登場している。とくにネコは、泣きじゃくる興子をみつめ（5 コマ目）、興子とともにからだを丸めてすやすやと眠り（12 コマ目）、封くんに髪をとかしてもらっている興子の横で、一緒に毛づくろい（13 コマ目）をするなど、まるで仲のよい「おともだち」のように描かれている。作中に登場す



▴興子と行動をともにするネコ

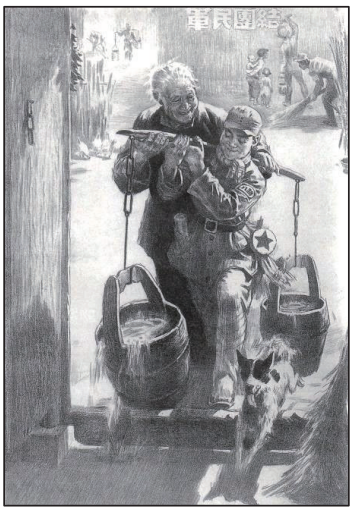
る生きものたちは、ときには情景をいろどり、ときにはこどもとふれあうことによって、非常に牧歌的で、また愛らしい雰囲気を生み出している。そこからは、「戦争」から離れた「平和」のイメージが感じられる。戦火の凄まじさを描いた 1、2 コマ目には、動物たちは登場しない。あどけない動物たちは、緊迫した「戦場」と、「八路軍のおじさんたちに守られたユートピア」とを対比させ、両者をより際立たせる役割を果たしているのではないだろうか。

■作者について

この作品の詩は姜維樸[4]が、絵は孫滋渓[5]が担当している（【図 1】）。姜氏は人民美術出版社連環画編輯室の立ち上げの中心的人物であり、当時、連環画編輯室の要職にあった人物である。また、孫氏は油絵「天安門前」（1964 年）や、石版画「小八路」（1977 年、第一回中国人民解放軍文芸賞受賞【図 2】）などを手がけた著名な画家である。姜氏の回想によれば、彼は、八路軍が日本人の孤児を救出し、日本軍に送り届けたという出来事を一連の報道で知ると、すぐさま連環画用に詩を書きあげ、その後、絵師を選んだのだという。姜氏は、孫滋渓を指名した理由についてこう語っている。「わたしは昔の戦友、中央美術学院教授・孫滋渓同志を真っ先に思い浮かべた。なぜなら、滋渓同志は革命軍の訓練を受けたことがあり、部隊の生活を熟知しているからであり、彼が創作した革命軍戦士を讃える作品、たとえば油絵「同学」、石版画「小八路」および小説『林海雪原』の挿絵などは、みな生活の匂いにあふれ、観るものに極めて深い芸術的印象を与える。独自の特色を備えた作品を表現するには、彼でなければ綴れない。果たして、滋渓同志はこの創作任務を温かく受け入れてくれた[6]。」



【図 1】姜維樸氏（左）と孫滋渓氏（2005 年撮影）



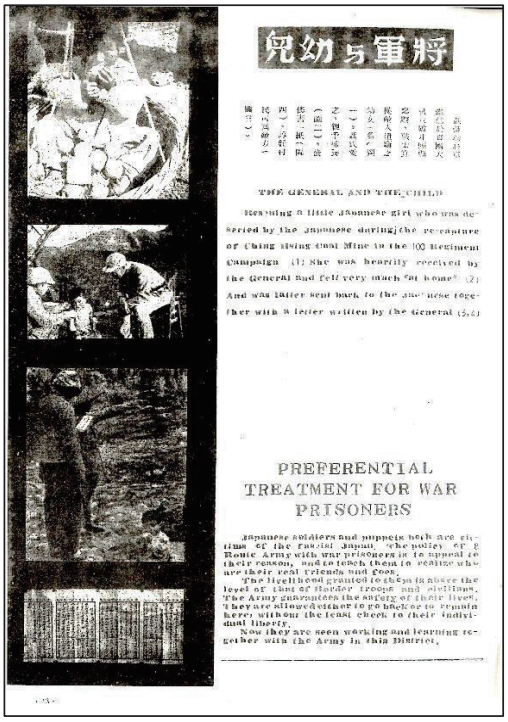
【図 2】石版画「小八路」

このように、連環画「太行山の松柏 九州の桜」は、姜維樸、孫滋渓という、ふたりの大家がタッグを組んで手がけた作品なのである。そのうえ、『連環画報』の表紙を飾り、20 コマ全てがカラー掲載されているのだから、当時、非常に注目された題材であったのだろう。

■従軍カメラマン・沙飛が撮影した孤児の写真

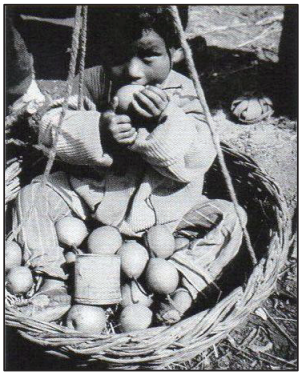
連環画「太行山の松柏 九州の桜」は「実際の出来事」に取材した物語であることは、先ほど述べたとおりである。では、「実際の出来事」とは如何なるものであったのか。

先掲の『人民日報』にみえる「日本の少女よ、今どこに？」によれば、かの日本人姉妹は、1940 年 8 月、河北省・石家荘と山西省・太原を結ぶ鉄道（当時の名称は正太鉄路）沿線にある東王舎村で救出され、司令部の接待所に保護された後、8 月 22 日、日本軍の片山旅団（独立混成第四旅団）の軍営に引き渡された[7]という。



【図 3】『晋察冀画報』に掲載された写真
▲ 上から順に図一、図二、図三、図四

このことは、『晋察冀画報』1942 年第 1 期（7 月 7 日発行号）に、当時を語る文章が残っていることからわかる。蕭斯「晋察冀の舵取り師・聶栄臻――敵後方の模範的な抗日根拠地およびその創造者の日常――」には、事件のあらましとともに、妹のために乳母を探し、姉にくだものや飴、ビスケットなどを与えるなど、こども好きの聶将軍がよるべない孤児をいとおしみ思いやる様子が記されている[8]。また、【図 3】の著者不詳「将軍与幼児」には、従軍カメラマン・沙飛の写真を説明した次のような記述がある。「聶栄臻将軍が部隊を率いて、百団大戦において井陘炭鉱を攻め落とした際、戦士が、敵方に遺棄された幼女一（ママ）名を見つけ保護した（図一）。聶氏はその子を愛で、自ら養い育てた（図二）。後に手紙を一枚したため（図四）、村民にねんごろに頼み、敵方に送り返した（図三）」[9]。【図 3】の写真（図一から四）は、不鮮明でいささか見にくいため、『沙飛撮影全集』[10]に収録されている、もう少しきれいな写真をご覧いただきたい（【図 4-7】）。これらの写真からも見てとれるように、連環画の絵師は、こうした史料をもとに作画をしていたのだろう。



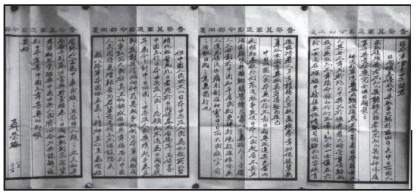


左上：【図 4】（図一）と同じ写真

右上：【図 5】（図二）と同じ写真
聶司令員（右）と孤児。

左下：【図 6】（図三）と同じ写真。
聶司令員のしたためた手紙を手にする農民。足もとには梨をほおばる孤児





右下：【図 7】（図四）と同じ写真
聶司令員が日本軍司令官に宛てた手紙。姉妹を「親族のもとへ送り届け養ってもらえるよう」に願っている。

沙飛の撮影した日本人孤児の写真は、この他にもまだあり、連環画のなかには、沙飛の写真と非常に似通った構図が見受けられる。【図 8】の写真と、19 コマ目がそのよい例である。また、連環画で興子が着ているパジャマのような衣服も、同じく沙飛の撮影した写真【図 9】をもとにしたものであることは明らかである。





【図 8】沙飛の写真と連環画

左は【図 4】とは別のアングルで撮られた写真（この写真は新華社の記事とともに紹介されたもので、『毎日新聞』や『朝日新聞』が聶将軍の呼びかけを報道した際にも使用された）。右は連環画の 19 コマ目より。

■「興子」ちゃん捜し

はじめに述べたとおり、八路軍兵士が日本人孤児を救ったという出来事は、その後 40 年という月日を経て、「日本の少女よ、今どこに？」という文章によって国内外に知られることとなり、日本の新聞各社も相次いでそれを伝えた。ただ、その際に伝えられた少女の名前は「美穂子」ではなく「興子」であった。これは、新華社の伝えた文章の末尾に、「本文を書き終えた後、作者が 4 月 25 日に聶栄臻副主席とお会いした際、この往事についてお話しし、聶栄臻副主席はこのようにおっしゃった。たしか、上の子の名前は興子だったように思う、と[11]」という作者による附記があったためである。



【図 9】聶将軍と孤児

それから数日後、『読売』の記者が「興子」ちゃんと思しき栫美穂子さんを見つけ出し、『毎日』『朝日』より一日早く、6 月 8 日日曜版の 22、23 面見開きで「「興子」は私です　よみがえった 40 年の歳月」を掲載した。

『読売』の記事は、日本側の親族・関係者の証言と中国側の報道とでは、両親の死の状況や名前が異なる[12]としつつも、「美穂子さんは両親の死後、「カゴに乗せられた」「ナシを食べた」とよく話していたという。その幼い日の記憶は、新華社が発表した「カゴに乗って聶将軍に別れを告げる日本人孤児」「ナシをほおばる日本人孤児」の組写真とピタリ符号する。そして何よりも残っている美穂子さんの幼時の写真と「興子」ちゃんは酷似しているし、さらに悲劇が起きた日時、場所、当事者の年齢まで一致することは、とても偶然とは思えない」と述べて、「美穂子」さんが「興子」ちゃんであることを伝えている。また、生後 7 ヶ月の妹の瑠美子ちゃんが日本に帰ることなく、石家荘の入院先で亡くなっていたことも併せて報道された。



【図 10】聶将軍との再会に涙する美穂子さん

『人民日報』も、「興子」が見つかったことを伝え、美穂子さんの近況や、聶将軍の喜ぶ様子などを連日報道した[13]。

その約 1 か月後の 7 月 10 日、美穂子さんは折しもじしんの誕生日に北京へと出発し、7 月 14 日に人民大会堂の新疆の間で、聶将軍と 40 年ぶりに涙の対面を果たした。【図 10】はその時の様子を撮影したものである。

■高まる「美穂子ブーム」

『解放軍報』の姚遠方氏によれば、新聞各社や中央電視台が「興子」ちゃんの情報提供を呼びかけてからというもの、本当に見つかるのだろうか、という問い合わせが多く寄せられ、「美穂子」さんが見つかってからは、喜びの手紙や詩、はたまた絵までも送られてきたという。

> 江蘇省如皋(ルガオ)県の小学生、鄧元苗(ドンユエンミャオ)君は、この美しい日中友好のエピソードをもとに映画をつくってはどうか、と提案してきた。自分で考えた映画の滑り出しとラストシーンの構想までつけ加えてあった。／上海の李小波(リシャオボ)という八十歳の老人も、大急ぎで人形劇の脚本を書きあげて、すでに上海人形劇団に渡した、と手紙で書いてきた。／上海のある労働者夫婦は、次のような手紙をよこした。／「私たちも、一日もはやく、日本の女の子が見つかるように、一家をあげて待ちのぞんでいました。五歳になる娘でさえ、いつもは新聞がくると、まず『今日のテレビの番組は？』と聞いていたのに、このごろは『日本の女の子、まだ見つからない？』と聞くようになっていました。見つかったと聞いて、胸のつかえがとれたような気持ちで、みながよろこんでいます」／……（中略）……解放軍某部隊の幹部、孫無赦(スンウシア)氏は、聶将軍をたたえ美穂子さんを祝福する二首の七律を寄せた。／……（中略）……戦争中、身寄りにはぐれ、中国人に養われて成人した日本の孤児たちも、何人かがお祝いの電話や手紙を寄せてきた[14]。
>
> （ルビは引用元による）

映画化を勝手に企画してしまったり、お願いしていないのにも関わらず脚本を書いて送ってしまう、という熱意あふれる行動は、中国の読者には珍しくない。それはともかくとしても、この記述から、当時の人々がどれほど「興子」捜しに熱狂していたかが伝わってくる。かくして、「美穂子ブーム」はその度合いを増していったのであった。

訪中した美穂子さんは、北京空港では多くのフラッシュやライトに囲まれ、行く先々でもみくちゃとなり、熱烈な歓迎を受けたという[15]。また、訪中にあたって、家族の写真を入れた大型の特製名刺を五百枚ほど用意したものの、はやばやと無くなってしまい、ときには、その名刺にサインを求められることもあったという[16]。日本のいち主婦である美穂子さんが、サインを求められた、という出来事からもその大変な人気ぶりがうかがわれるが、五百枚の名刺が、すぐに無くなってしまったという事実からも、当時の中国人の熱狂ぶりが見て取れる。こうして、美穂子さんは「時の人」となり、そして、この「美穂子ブーム」の波に乗って、八路軍に救出された日本人孤

児のものがたりは、連環画へと姿を変えて紹介されたのである[17]。

ちなみに、美穂子さんの記念すべき第一回目の訪中では、子守役であった封奇書との再会は果たされなかった。帰国後、美穂子さんが封奇書に宛てた手紙には、大恩人である封奇書との再会を期待していたが、「北京市中日友好協会からのすべてのスケジュール」の中で会えなかった旨が記されている[18]。一方、封奇書も、美穂子さんに宛てた手紙のなかで、封奇書本人はもちろん、美穂子さんをかごに乗せ日本軍に届けた農民の李化堂、そして美穂子さんの妹・瑠美子さんに乳を与えた農婦・陳文瑞たちも、美穂子さんの訪中を心待ちにしていたこと、40 年前に美穂子さんが滞在した古月村に集い、歓迎会を開こうと喜び勇んで準備していたものの、再会できなかったことが記されている[19]。【図 11】は、美穂子さんとの再会を心待ちにしていた人々である。しかし、美穂子さんに用意された二週間におよぶ旅程は、きわめて公的なものであった。そのスケジュールは、例えば、中国人民革命軍事博物館の抗日博物館で、40 年前のじしんの写真や、「日本侵略軍」が中国の「解放区」で実行した「三光」作戦の実情を示す写真を見て回る、あるいは美穂子さんと同じように、やさしい中国人に救われ育てられた残留孤児と交流する、といったものであった[20]。



【図 11】左から当時を語る封奇書、陳文瑞、李化堂

■連環画「太行山の松柏 九州の桜」の創作経緯と目的

はじめに述べたとおり、連環画「太行山の松柏 九州の桜」は、「美穂子ブーム」のなかで創作され、それはまた「中日友好」が盛んに叫ばれていた時代に創作されたものであった。1972 年、日本は中国と国交を結び、1978 年には、「日中平和条約」を締結している。つまり、1972 年以降、日中関係は徐々に、良い方向へと発展していた。まさに「美穂子ブーム」前後の宣伝画が、その関係性を如実に表している。【図 12】の宣伝画「友誼之歌」（王美芳、趙国経作、1979 年）は、万里の長城でアコーディオンを弾き鳴らし「友誼の歌」を歌う中国の女の子を中心にして、演奏に耳を傾け

る友好国の人びとが描かれているが、そのなかには、着物姿の日本女性が見える。【図 13】の宣伝画「桜花時節」（申申作、1981 年）は、鄧穎超（周恩来夫人）が 1979 年 4 月に訪日した際の友好ムードを描いた作品である。これらを見れば、中国が日本を友好国のひとつと見做し、さらには、「日本と仲良くする中国」を宣伝していたことがうかがえる。

この頃、これをテーマとした舞台劇やドラマ、映画が中国で多く制作された[21]が、『連環画報』においても、例外ではない。「一袋大米花（ひと袋のポン菓子）」（1979 年第 6 期掲載）を皮切りに、『連環画報』では、「藤野先生」（同年第 11 期掲載）、「地蔵菩薩和斗笠（かさこじぞう）」（1980 年第 1 期掲載）、「古蓮伝新誼（古い蓮が新たな友情をつなぐ）」（同年第 3 期掲載）、「夕鶴」（同年第 6 期掲載）など、「日本」や「中日友好」をテーマとした作品が次々と発表されている。





上：【図 12】「友誼之歌」
下：【図 13】「桜花時節」

本稿で取り上げた連環画「太行山の松柏 九州の桜」が「中日友好」をテーマとした作品であることは、非常に明確である。しかし、この作品が伝えたかったことは、果たして「中日友好」のみであったのか。その答えを探るうえで、姜維樸氏が後に語ったこの作品の創作経緯について、触れておきたい。

> 当時わたしは、この記事を読んだ後、非常に感動した……（中略）……そしてわれら八路軍が日本孤児を救ったという業績は、まさしく、中国抗日軍民の崇高な人道主義精神と寛大な心を力強く表現している。そして、それは日本ファシストが我が国の罪なき群衆、婦女児童を残虐に殺害した血なまぐさい犯罪行為と並べると、なんと鮮明な対比をなしているのだろうか！　わたしは、絵も多く文も優れた連環画を通して、このような精神を大いに発揚し、中日人民と子々孫々とに永遠に記憶させ忘れさせぬようにせねばならないと思いいたったのである！　そこで、わたしは高ぶる気持ちを抱きつつ、幾晩かを利用して、この『太行山の松柏 九州の桜』という題名の連環画詩を書きあげた。[22]
>
> （下線は池田による）

姜氏の言葉を整理すると、以下の三点になる。①八路軍が日本人孤児を救出したことは、中国抗日軍民の崇高な人道主義と寛大な心を表現している、②八路軍が日本人孤児を救出した行為は、日本の「ファシスト」による残虐的行為とは極めて対照的である、③中日人民の子々孫々に中国抗日軍民の崇高な人道主義と寛大な心を連環画を通して伝えたい。つまり、この作品において伝えたいことは、「中国抗日軍民の崇高な人道主義と寛大な心」なのである。そして、②については、いま一度、連環画に登場する小さな生きものたちと、それらが作り出す牧歌的な、「八路軍のおじさんに守られたユートピア」を思い出していただきたい。この「平和」な世界と朱に彩られ緊迫した「戦場」との対比は、「中国抗日軍民の崇高な人道主義と寛大な心」をより一層際立たせるためのものだったのである。

もう一歩、「美穂子ブーム」について踏み込んでみるならば、1982年に日中で同時出版されたドキュメンタリー集『将軍と孤児』のまえがきのなかに、興味深い表現があるので取り上げておきたい。

> 聶将軍は中国共産党の元老の一人である。彼がこのようなことをなし得たのは、共産主義に対する根本的信念に基づいているのである。／また、晋察冀の人民と兵士がこのようなことをなし得たのも、共産党の教育の結果である。[23]

これによれば、日本孤児を救出したことは、「共産党の教育の結果」である。ここから読み取れるのは、つまり「共産党への賛美」である。美しい出来事は、全て共産主義の賜物なのだ。美穂子さんが訪中した際のスケジュールに、封奇書や村人たちとの再会ではなく、抗日博物館の見学や残留孤児との交流が組み込まれていたことからも、それはうかがえる。連環画創作を含む「美穂子ブーム」は、「中日友好」と「共産党への賛美」とがうまく絡み合い、引き起こされたものであったのではなかろうか。むろん、「興子」ちゃん捜しと美穂子さんの訪中が、これほどまでに日本のマスコミに取り上げられたのだから、日本側にも相応の事情があったことは、言を俟たない。これらについては、また別の機会に論じたい。

■美穂子のものがたりは終わらない

現在、「美穂子ブーム」はすでに幕を下ろしているが、美穂子さんじしんの「日中友好」のものがたりはまだ終わってはいない。「抗日戦争勝利60周年」であった2005年、美穂子さんは、じしんを戦火のなかから救出した（連環画の2コマ目に描かれている）元八路軍兵士・楊仲山と実に65年ぶりに再会し、謝意を述べた（【図14】）。美穂子さんはそれまでに5回の訪中を果たし、封奇書、李化堂、陳文瑞の墓参りなど

恩返しの旅を続けた。1992 年に聶将軍が逝去した際には、弔電を送り、聶将軍の娘の聶力氏とは、毎年、年賀状を送り合う仲であるという[24]。また、聶将軍の故郷である重慶市江津区と、美穂子さんの住む都城市は、1999 年以来、友好交流都市として提携し、その関係はいまなお続いている[25]。

連環画については、2006 年、『連環画報』掲載から約 20 年の月日を経て、人民美術出版社から画集『太行山の松柏 九州の桜』が出版された。序に代えて姜氏が寄せた文章、そして 1940 年に沙飛が撮影した写真が物語の前に添えられている。本編は、封くんと「興子」の交流を描くものがたりであるが、【図 15】を見てわかるように、聶将軍がその表紙を飾っている。また、もともとは全 20 コマからなるものであったが、2006 年版は雑誌掲載版の 18 コマと 19 コマとのあいだに 1 コマ加えられ、全 21 コマとなっている（【図 16】）[26]。姜氏は、この画集を聶力氏に二部送り、そのうちの一部を美穂子さんに送ってもらったという。『連環画報』2007 年第 7 期には、画集を受け取った美穂子さんからの感謝の手紙とともに、2006 年版の全コマが掲載されている。

また、温家宝総理が 2007 年に来日した際には、国会で演説した「友情と協力のために」のなかで、聶将軍と美穂子さんのものがたりについて言及している[27]。この演説を聞いた日本の政治家のなかに美穂子さんのことを知っている人がどれくらいいたかは定かではない。しかし、美穂子さんのものがたりは、「中日友好」を象徴する美談として、中国政府によって、これからも語り継がれてゆくことだろう。



【図 14】美穂子さんと楊仲山氏



【図 15】2006 年版表紙



【図 16】2006 年版 19 コマ目

図版出典

【図 1、15、16】姜維樸／編文、孫滋渓／絵画『太行的松柏九州的桜』（人民美術出版社、2006 年）

【図 2】中国現代美術全集編輯委員会編『中国現代美術全集　版画（1）』（貴州人民出版社、1998 年）

【図 3】著者不詳「将軍与幼児」（『晋察冀画報』1942 年第 1 期）

【図 4-9】王輝名誉主編、王雁主編『沙飛撮影全集』（長城出版社、2005 年）

【図 10、11】姚遠方編著、田島敦訳『将軍と孤児』（サイマル出版社、1982 年）

【図 12】Marien van der Heijden, Stefan R. Landsberger, Kuiyi Shen, *Chinese Posters. The IISH-Landsberger Collections* (Prestel, 2009)

【図 13】陸克勤編著『新年画図録――中国年的記憶』（上海書店出版社、2008 年）

【図 14】『人民日報』電子版（2005 年 8 月 26 日、8 面に掲載された記事、楊文道、于青「“日本小姑娘”面謝老八路（記念中国人民抗日戦争勝利 60 周年特稿）」より）

---

1 姚遠方「日本小姑娘、你在哪里？」（『人民日報』、1980 年 5 月 29 日、7 面）。

2 姚遠方編著、田島敦訳『将軍と孤児』（サイマル出版社、1982 年）53、54 頁、「興子ちゃん姉妹、今どこに」（『読売新聞』1980 年 5 月 29 日、朝刊、23 面）を参照。

3 『読売新聞』の記事は注釈 2 と同じ。『毎日新聞』は、「どうしてますか興子ちゃん姉妹　元八路軍将軍、40 年の熱い思い　戦火から助け出し　守りぬいて日本軍へ」（1980 年 5 月 29 日、朝刊、23 面）、『朝日新聞』は、「ナシを食べる興子ちゃん」（1980 年 5 月 29 日、朝刊、22 面）である。『読売新聞』は、新華社の記事の詳細を紹介するとともに、当時の日本側の関係者にも取材を行なっているが、『毎日新聞』は、『読売新聞』と同等の紙幅はさいているものの新華社の記事の詳細を紹介するのみ、『朝日新聞』にいたっては、二社の四分の一程度のスペースに、写真一枚と、新華社の記事のあらましを紹介するのみに留めている。本件に関して、日本で最も積極的な報道を展開したのは、『読売新聞』であるため、本稿では、おもに『読売新聞』の記事を取り扱う。

4 姜維樸は、1926 年生まれ、山東省出身。新中国建国初期は、上海の『華東画報』の主編を担当していたが、1953 年に人民美術出版社へ移動し、同社の連環画編輯室立ち上げの中心となり、その後、『連環画報』編集室主任、副主編や連環画編集室副総編輯などを歴任。また、1983 年に中国連環画研究会を、85 年には中国連環画出版社を設立した。2009 年の時点で、中国出版協会連環画芸術委員会主任を務めている。姜氏が出版を取り仕切っていたものに、『水滸』、『岳飛伝』、『楊家将』、『西廂記』といった広く知られたシリーズものがある。近著は『新中国連環画 60 年』（人民美術出版社、2010 年）。劉波主編『中国当代文化芸術名人大辞典』（国際文化出版、1993 年）、林陽「与連環画同呼吸、共命運――我熟識的姜維樸先生」、『美術之友』2009 年第 6 期など参照。

5 孫滋渓は、1929 年生まれ、山東省出身。1945 年に八路軍に参加し、1946 年に共産党へ入党、部隊での文芸工作に勤しんだ。2009 年の時点で、中央美術学院教授、中国油画学会理事、中国美術家協会挿図装幀芸術委員会副主任を務めている。また、歴代全国美展、第二回中国油画展、20 世紀中国油画展、中国五千年芸術展（於 ニューヨーク・グッゲンハイム美術館）など、国内外の重要な展覧会に出展し、第一回中国人民解放軍文芸賞や北京市優秀美術作品一等賞などを受賞している。代表作として、油絵「同学」（1963 年）、「天安門前」（1964 年）、「母親」（1981 年）、石版画「小八路」（1977 年）、小説『林海雪原』挿絵（1959 年制作、作家出版社版、外文出版社英文版）などがある。連環画は『彭総游北海』（1980 年）、『裙子』（1982 年）などを手がけた。孫滋渓『孫滋渓画集』（天津人民美術出版社、1984 年）、成雅「孫滋渓先生的“紅色情懐”」、『中国美術館』2009 年第 6 期など参照。

6 原文「我首先想到老战友 —— 中央美院教授孙滋溪同志。因为滋溪同志经受过革命队伍的锻炼，熟悉部队生活，他创作的歌颂革命部队战士的作品，如油画《同学》、石版画《小八路》及《林海雪原》小说插图等，都富于生活气息，给人以极为深刻的艺术感受。表现这部别具特色的题材，非他莫属。果然，滋溪同志热情地接受了这一创作任务。」姜維樸「高揚人道主義的壮歌（代序）」、姜維樸編文、孫滋渓絵画『太行的松柏九州的桜』（人民美術出版者、2006 年）。

7 『読売新聞』の取材によれば、孤児が送り届けられたという独立混成第四旅団の旅団長であっ

た片山正太郎氏は「記憶にない」とインタビューに答え、「旅団といっても五大隊二十中隊もあったし、そのどこかの部隊で処理したのかも知れない」とも話している。前掲「興子ちゃん姉妹、今どこに」参照。

8 蕭斯「晋察冀舵師聶栄臻――敵後模範抗日根拠地及其創造者的生平――」(『晋察冀画報』1942年第1期) 参照。

9 原文「聶榮臻將軍率部於百團大戰攻破井陘礦之際,戰士覓護敵人遺棄之幼女一名(圖一),聶氏愛之,親予哺養(圖二),後修書一紙(圖四),諄託村民□回敵方(圖三)」、著者不詳「将軍与幼児」(『晋察冀画報』1942年第1期) より引用 (□の箇所は不明)。

10 王輝名誉主編、王雁主編『沙飛撮影全集』(長城出版社、2005年)。

11 原文「在本文写出之后, 作者于四月二十五日见到聂荣臻副主席, 谈起这段往事, 聂荣臻副主席说: 记得那个大孩子名叫兴子」前掲「日本小姑娘、你在哪里?」より引用。

12 他にも、日本側の関係者のなかでは、美穂子さんは八路軍に「連れ去られた」とされており、さらに「美穂子ちゃんは八路軍に連れて行かれたが、ナシやコーリャンの食事が合わず、間もなくカゴに乗せられて途中の駅に返されてきた」とされていたという。これに関しては、敵方の行動を主観的に捉えた結果の食い違いであったとも考えられる。

13 「日本小姑娘“興子”在這里! 聶栄臻将軍在抗日戦争中救出的日本小姑娘、原名叫美穂子。她現在是三個孩子的媽媽、住在日本宮崎県都城市梅北町」(『人民日報』、1980年6月11日、7面)、姚遠方「祝福你、美穂子!」(『人民日報』1980年6月12日、6面)、13日の4面に北京晩報記者「“我祝願美穂子全家幸福” 聶栄臻副主席向≪北京晩報≫記者暢談感想」(『人民日報』、1980年6月13日、4面)、美穂子「美穂子給聶栄臻将軍的信」(『人民日報』、1980年6月13日、4面)。

14 姚遠方「美穂子さん、おめでとう」、姚遠方編著、田島敦訳『将軍と孤児』(サイマル出版社、1982年) 65、68-70頁。

15 栂美穂子「わが第二の故郷、中国」、同書、124、127、128頁。また、熱烈な歓迎ぶりは、日本でも報道されている。「美穂子さん“熱烈歓迎” 北京到着 40年ぶり、中国の土踏む」(『読売新聞』1980年7月11日、朝刊、22面)、「40年ぶり「私の故郷!」 美穂子さん、北京着 もみくちゃ歓迎 “生命の恩人”聶将軍と対面へ」(『毎日新聞』1980年7月11日、朝刊、23面) など。

16 前掲「わが第二の故郷、中国」、前掲『将軍と孤児』、128頁。

17 連環画のほかに、書籍化、映画化もされている。書籍は、関係者が綴った文章を集めたドキュメンタリー集であり、日中国交正常化10周年を迎えた1982年に、日中両国で同時に出版された。中国版は、姚遠方等編著『将軍与孤女』(上海人民出版社、1982年)、日本版は、前掲『将軍と孤児』。映画は、「将軍与孤女」(八一電影制片廠、1985年) である。これらの書籍や映画の仔細については、別稿に譲る。

18 「孤児と老戦士の交流書簡」、前掲『将軍と孤児』、150頁。

19 封奇書が美穂子さんに宛てた手紙にこのようにある。「今年七月、あなたのご一家が中国を訪問されるという知らせを聞き、われわれは、どのように歓迎したらいいかわからないほど、喜びました。平山県の指導部と土地の人たちは、あなたが滞在した古月村で歓迎会をひらき、親しい者同士があい集い、中日の友誼を語り合おうと準備していました。当時あなたの妹さんの乳母になった陳文瑞おばあさんも、二十キロほどはなれた南庄(ママ)村から、わざわざくることになっていました。/私は、当時あなたを聶司令員兼政治委員のもとに送っていった道すじや村々を、ご案内しようと思っていました。あなたを知るかぎりの人はみな、あなたに会いにくるつもりでした。/残念なことに、われわれはあなたに会えませんでしたので、なおさらなつかしく思っています。あなたの手紙と写真がとどくと、平山県の人たちは、「美穂子の手紙がきたよ」とふれてまわったほどです。」また、この手紙には、『連環画報』を同封する旨が記されている。おそらく、「太行山の松柏 九州の桜」が掲載された号であろう。「孤児と老戦士の交流書簡」、同書、153、154頁。

20 ここで補っておくと、スケジュールの全てが決められたものであり、美穂子さんの意志ではない、ということではない。聶将軍との再会は美穂子さんのたっての願いであった。また、両親と妹の眠る地、井陘炭鉱と石家荘へ行くことも叶えられた (ただ、美穂子さんの来訪を知って駆け付けた5千人の人々や、日中両国の新聞記者に取り囲まれたために、ゆっくりと手を合わせ、香

を手向けることはできず、心のなかで冥福を祈ったという)。前掲「わが第二の故郷、中国」、同書、126、127 頁参照。また、姚遠方氏によれば、「美穂子さんの心からの要望」で、八路軍戦没者墓地(石家荘の華北軍区烈士陵園)に行き、花をささげたという。姚遠方「如夢令(詞三首)——美穂子さんを送る」、前掲『将軍と孤児』、140 頁参照。

21 かつて残留孤児であった主人公が 30 年ぶりに中国を訪れ中国の家族と再会する物語、映画『桜さくら』(1979 年)もそのなかのひとつ。美穂子さんと対面した際に、聶将軍がこの映画について触れ、「あなたの身内をたずねてきたと思って下さい。あなたに似た境遇の人も少なくありません。中国で『桜』という映画をやっていますが、そのような境遇を描いたものです。ただ違うところは、あなたの場合、戦闘の前線において救出されたということです」と述べている。朱敏之、肖慶璋「将軍と孤児の再会の日」、前掲『将軍と孤児』、117 頁。また、日中蜜月期における「中日友好」をテーマとした映画やドラマについては、劉文兵『中国抗日映画・ドラマの世界』(祥伝社、2013 年)第三章第一節「日中蜜月期とアンビヴァレントな日本のイメージ」に詳しい。

22 原文「当时我读了这篇报道之后,心情十分激动,……(中略) ……而我八路军救护日本孤儿的事迹,真实有力的表现了中国抗日军民崇高的人道主义精神和宽大的胸怀,与日本法西斯残酷杀害我国无辜的群众、妇女儿童的血腥罪行,形成多么鲜明的对比! 我想到应该通过图文并茂的连环画,去弘扬这种精神,让中日人民和子孙后代永记不忘! 于是,怀着激昂的心情,利用几个晚上的时间写下了这部题为《太行的松柏九州的樱》连环画诗。」前掲「高揚人道主義的壮歌(代序)」。

23 魏巍「心と心をつなぐ橋——まえがき」、前掲『将軍と孤児』、12 頁。

24 楊仲山氏との再会に関する記事は、楊文道、于青「“日本小姑娘”面謝老八路(記念中国人民抗日戦争勝利 60 周年特稿)」(『人民日報』、2005 年 8 月 26 日、8 面)など参照。美穂子さんの「恩返しの旅」については、孫東民「戦時悲喜事今日美穂子(記念中国人民抗日戦争勝利 60 周年)」(『人民日報』2005 年 7 月 9 日、3 面)、劉千生「美穂子的報恩之旅」(『人民日報』、2005 年 8 月 30 日、16 面)など参照。聶力氏との再会については、「8 月 24 日、聶栄臻元帥的女児聶力与 65 年前被聶帥救護的日本“小姑娘”美穂子 “我們永遠是姐妹”(記念中国人民抗日戦争勝利 60 周年特稿)」(『人民日報』2005 年 8 月 25 日、5 面)参照。

25 都城市と重慶市江津区(締結時点では、江津市)との提携は、聶将軍のたっての希望であり、聶将軍生誕 100 周年の 1999 年に締結した。前掲「戦時悲喜事今日美穂子(記念中国人民抗日戦争勝利 60 周年)」、「中国重慶市江津区との交流」、『都城市 HP』、http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/display.php?cont=121011145138、(最終アクセス日:2014 年 12 月 25 日)参照。

26 聶将軍が、夜更けに日本軍司令官宛ての手紙をしたためている場面であり、「山村はとうに夜が更け寝静まり/ただここにあかりが灯るのみ/偉大な胸のなか波涛が揺れ動き/力強い筆勢で蓋世の美文を綴る(原文:山村早已夜阑人静, /独有这里亮着灯光。/伟大的胸怀波涛激荡, /苍劲的笔锋写下盖世华章。)」という詩が加えられている。これは、もともと雑誌掲載版の 19 コマ目に突如登場する「手紙」が、現在の読者には通じなくなっているからであるという理由も考えられるが、姜氏は「最後の 2 コマの内容と密接に繋がり、作品のクライマックスの感染力を増強させ」るためであると語っている。

27 その内容は以下のとおり(池田訳)。「……中国の一世代前の指導者がかつて度重ねて指摘しています。あの侵略戦争の責任は、極少数の軍国主義者が負うべきであり、多くの日本国民も戦争の被害者であり、中国人民は日本国民と仲良く付き合わなければならない、と。戦火が飛び散っていた時期に、聶栄臻元帥は戦場で日本人の孤児・美穂子さんを救助し、自ら心を込めて世話をし、そして手を尽くして彼女を家族のもとに送り帰しました。1980 年、美穂子さんは家族とともにわざわざ中国へ足を運び聶元帥を訪ねました。この話に多くの人々が心を打たれました。……(原文:……中国老一辈领导人曾多次指出: 那场侵略战争的责任, 应该由极少数军国主义分子承担, 广大日本人民也是战争受害者, 中国人民要同日本人民友好相处。在战火纷飞的年代, 聂荣臻元帅在战场上救助日本孤儿美穂子, 亲自精心照料, 并想方设法把她送回到亲人身边。1980 年, 美穂子携家人专程去中国看望聂帅。这个故事感动了许多人。……)」「為了友誼与合作——在日本国国会的演講 中華人民共和国国務院総理 温家宝 (2007 年 4 月 12 日 日本東京)」、『人民日報』、2007 年 4 月 13 日、2 面)参照。